

農業経営部会通信

38号

今月の例会報告

ISO22000認証取得の(有)北広牧場視察例会を開催

農業経営部会は7月8日に7月例会を開催し、新得町で酪農・乳製品加工を行う(有)北広(ほっこう)牧場を視察しました。

同社取締役の若杉真吾 氏のご案内で場内を視察。各所で社員さんにもお話を伺いながら、搾乳施設・哺育舎・牛舎・加工工場を順に周りました。同社はISO22000を取得しており、HACCP規格を内包した食品安全の取組や社内の仕事の見える化、社員教育でも様々な取組をしています。一度決まった業務につくと継続して同じ業務を担い、熟練させていくことが多い農業ですが、同社ではジョブローテーションの取組を採用。新入社員は約2週間ずつ順々に搾乳や哺育から加工まで全ての業務を体験し、その後も3カ月から6カ月程度で各部署を異動していきながら仕事をしていきます。そうすることで酪農経営に必要なスキルをトータルに養うことができ、

お互いに業務を助け合うことができるようになります。これにより年間休日は100～110日と高い水準となっています。このジョブローテーションを可能にしているのがSOP。いわゆる標準作業手順書です。各部署ごとに写真をふんだんに使用して細かくわかりやすく作成することで、牛に触れた経験が少ない新入社員でも仕事ができる体制ができています。

最後に今後オープン予定のサイロをリフォームした宿泊棟や朝ドラ「なつぞら」の撮影セットも視察。参加者は今すぐに取り入れたいことがたくさんあったと多くの学びを得ることができました。



←今後オープン
予定の宿泊棟

AIを活用した収穫ロボット

農業新技術グループでは6月25日に例会を開催。Inaho(株)の菱木豊 代表取締役CEOをお招きして、同社が提供するアスパラの自動収穫ロボットとその提供スタイルについて、また各国でのロボット活用

の取組についてお話を伺いました。
inaho(株)は、現在アスパラの自動収穫ロボットを提供。初期投資額が大きくなりがちな農業機械ですが、同社では初期費用・メンテナンス費用無料で収穫量に応じて費用が発生するスタイルをとっています。このロボットを導入するまでには営農スタイルの変化も必要で、ロボットが動くことができる動線づくりや植え付けの方法によってその成果が大きく変わってきます。世界的に見ていくと機械の導入のために定植方法を変えたり、品種を改良することは一般的。ロボット収穫に耐えうるよう硬めのトマトの品種が作られたり、日本では頭上に生っているのが一般的なぶどうも機械収穫ができるように一直線に植えられ

ているなど海外の大規模農作の現場から学ぶことは多くあったそうです。アスパラの収穫では、今まで一般的だった平畝栽培から高畝栽培に切り替えることでロボットの動線確保や身体負担や管理コストの低減と共にロボットの活用を普及しています。収量は減らさずに営農方法を改良することには非常に苦労を重ね、まだ研究途中でもあるそうです。

今後はアスパラだけでなくきゅうりなどでの活用も進めるとのことですが、北海道では露地での栽培がメイン。これまではロボットを活用できる環境整備ということでハウス栽培にしか対応できていませんでした。道内でも協力機関と共に研究を進めており、今後の展開に期待がかかります。いずれにしろ非常に人手がかかっていた野菜の収穫。革新的な一手になることは間違いなさそうです。

農業経営部会今後の予定

例年8月の最終日曜日に開催してきました「収穫感謝祭」。昨年はコロナ禍の状況を鑑みて中止としましたが、今年は開催に向けて準備を進めて参りましたが、しかし、北海道でもまん延防止等重点措置の再要請が行われるなど落ち着きをみせません。

非常に残念ではございますが、イベントとしての開催は中止とすることと致しました。せめて十勝農業に触れてもらう機会をと特別セットを作成し地域の皆様にご提供することと致しました。大変ご好評を頂き、予定販売数は完売してしまいましたが来年の再開に向けて弾みのつく企画となりそうです。